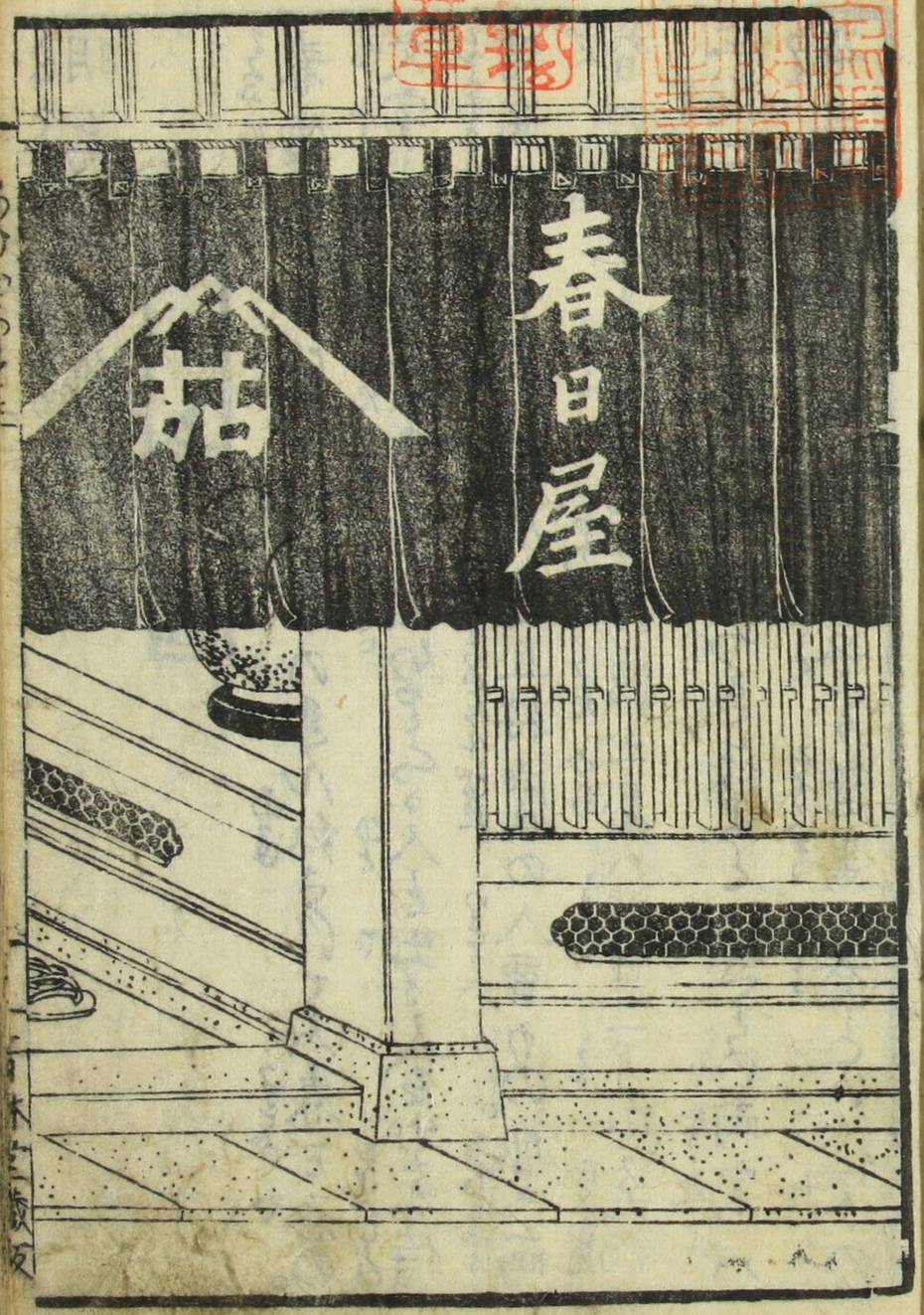
浦軍
時代考

明治維新史

初編

下

へ 13
2909
6



門へ13
號 2909
巻 6

昭和九年
七月十日
購入

明烏後正夢三の巻

五

春霞ひくやひさしの。ちぐのまん紅さくてふ春日屋の。
文字もめぐ度角屋敷いやもつる人と生る人を出家侍
諸商人百万石（御用達且按摩の入替の。質屋両
皆の賑ハしさ見世の並乃脇土蔵ハ。間口二丁ふ奥行
三間二重袖巻小蛇腹つき。仕まとけてとの両宮ハ
本三重のゆを見しし。磨立さる惣黒ゆ春とゆ字の
鼻ぶりハ。端をあらぐく二文戸前所久しき分限帳指
を折て地面採ハ家ゆ古き番頭金六。ゆをとあて
當家の支配人とゆうねだりの忽鮮ぶりゆ代
と称めまり。全リや蚊七どの一昨日いつけさ圓塚さゆ
の利根の拭合まぐ拵ぬ。ろやらぬ。のらゆ
せぐと。元付さろしやをとをまるぶ下ト毋ら。大旦ハ
大且ハぐ。御隠居さゆゆ逆ハ生。さきも有れぬ後生
頬絹支糸の御まのと。ひとさろく出歩て。佛

ぶりの。日間はのこ〜。若且那い鬼の姿ちふせん
たくじゃと。悪所ぐるひの赤縮緬を女房式つまくり行
ぎ方をまで。詰る所を義弘めのこく。拙亀玉義の砂去
のよりのどもか〜と毛穴ごとに。若且那をあろう
ふ〜て。外ゆも大分嵐穴引きちのある夏きまつて
いる。チトこの式つけくのひさひ。コリヤ〜小僧ヨコレ丁松
うまもも芸禁粉ぶん。ふひうげんよせん。とのこく又灰吹
あけ強スナ。そまあまんさら奥入行く。もひぐよそあいの

てナ。おてるさんの出業容紬出が出来さまのう。云伯松へ
ものく行業綱合まるふ左宮の扶右ふ式吸ぐ
さひ。あの男もも〜からあ茶年へと〜をるうまうん。
ろうい元こまぐもぐ口だろいのあるぐやコリヤ丁松まうと
観物をかろ〜てあるる武夫係ょ行次郎ま角を
いまるで我ご方ご古業ぐまひとさまくをもう瀬戸
ものの細工の関物の格ょ。形紬だろう大きて用ょこん
奴でそあ。小言さらぐ出納ニ茶の羽織引かう

全六ハ出入屋捕の捻合を臭ようけくそ出くわ。
節抱の蜘五郎四季芸の半天うと羽おうまゝ鳴の服ら
ゆもたうゝ義見せあいさゝまちぐ。ぎのうび床の毒六ゞ油
つけぐの水ぐゝそ。組合中の張弘というねどちくるちり
うちちのきんをうぐて「ヘイとんちやア「ヨイ蜘乙ひ比へ
お見うぐりダノ「うゝそふゑ。きのう一チ日ハの殺人斗りぐ
おぐんせと。おゝひのまゝ抱のきんぐめぐ。いちん時苦
ろうちゆ「たうけ「ホンミそのぐうけちんぐろいち日朱ね人

とゝ「くあゝれ「うぐ「うゝ「ゝゝやア女だうゝと思つたら。
男も出つたりちい「ゝがそ出ア。ア色男へうるせんぐ
「この男も屎「ゝのうりい。ゝ来るとたまるうゝちのあるぜ
「イヤ奥でもサヅおぐまくぐぐうゝろう。鳥渡顔を出を
やせうゝ。ぐうとゑう「ヘイお袋様ハ機ぐんうゝんちやア
おうゝさゑへどちゝ「ヨイあくどぐうゝ寺来ゝ行ゝうて。
俄七を連く行ゝ「ヘイそまゝおさゝちうおぐうと
ゝ出せう「ゆあまぐさみ「いうりお照ぐちんぐ又塩梅ぐ

つるそんな顔つき。光さんぬ チウトむぐ口でもうこそ
せぬ 板よりそこへちぐせ人 妹 へイかくしたりまーこ。
どんもおまろこ也病 まぐそぐりやお見舞申さうと。
いつくお照ぐ部屋の口そのとのぞひく 妹 へイ 妹 五郎ぐ
どぐるまた。こんちやあおあんべ塩梅 ぐろうでぐざぬまた昭
へたつとをあぐりまーこ 照 ぐ 妹 五郎どんぐ。たびぐ
おこぐけ。屏風をそろちへ明て。ちつとをるーる 妹 上て
そをぐろうんどぐりまた。と屏風をぐろとひろげふがら

「おんまア走おあてくお出あるるこい 板 ふぐ見ハヤレく
病ぐ明ケさうぐ かつたりぐ 暗 ぐきるれ 丈ぐれ
とりあくおぐでアさんよ大きくきる高くくれ 変ーふ
をまーたべさらそをぐつくく今日ハ一トしからぐ見
ぐつくく液だりおく 妹 アヽモシさやとんぐ子ぐるう
おぐりまた病きあるるさの病 ぐ 乳 ぐ 夫
よまア先のさ光まぐくくと 案 ぐつげくぐざる板子
ちくやたぐ又 妹 五郎めぐらんの 変 とうさくも

おてる
蟬五郎

おひな

思〳〵めそうが親父の代こゝお店の内思ふく言つさ
こそ〳〵だのこゝろい支アヤ〳〵やせんマア何支も命みつて
のめぐねが彼の一件か私が呑込ぎあまきとうら
さんたりとこゝはきこくお出なさんあ〳〵こわくぐこゝろ
付ケの乗りきのふ袋ケ窪の拭合もこゝろかこゞけ
若旦那の方へめくりまく〳〵分支の澄文をお渡申
おめくさんの出涙切もこゝろ〳〵お断申たら女のさ
でさいこゝぬ支とも服を支ちまきこゝろあんごろ一蛛ケ谷

あめくおたこゝろ支どまこゝろこ澄文をあめよ揺ケこゝびこゝろ
ゐきこゝろくコル蛛五郎あゝこゝやモウちんゆもいこゝぬこんゐ
ふらちる者ゞあいゝ女房を持て見ゝとふまで
苦労をさせこゝとハちんよめこゝりゞあこゝろ〳〵唯かんゆん
ちくくこゝまこゝろといこゝて〳〵こゝを袴をいゝのもめんゞくゐくこゝ
みこゝも安こゝて人が出通り眼ゞ一ナニお眼でもこゝるのこゝ一三〇イ工蛛
なアよちこゝと斗りのゞせ眼ゞごゞこゝりやせこゝ三里でもこゝ
ると変り安こゝと一フウそこゝでこゝさまあ〳〵おこゝれ〳〵そんであこゝ

味イヤサうまくそんぐらいのうちの方へ向ッてくを合て
ちぐみあきうり丹一ト安テゆうこうおもやせ一頬ゆう
窪む両靨へ百日ぶりの笑顔あり おろうろ下女ハイお
糸が出来ましたと今日ハ又お加減がちぐひまして
ごぎれまた味おひげどん上味いつもお茶の味ヨヤく古イる
をいてあきるねへ味あんまり古いうもいつもお茶とけのよ
あわるこ今年も来ぐろう全六さんとけの色男式
捨こ、ぐらへ行うまるものう味ひろうておこれあんが私の
ゆうるのあんでもあんなひげッ面のこんぜうこう式あんふ
者
ものうホンミ全六さんのおくみ様よあるものハ味小ト
仕夏ぐ丹せうあるぐろうよ味ナニサあのうへナ者ハ女
房をが可愛ぐるものサ味モシかこんぐこれてハ狐あて合れ
丹めへあるのおそるる顔色ぐねへ味その色ッこのが
あひぐのそみサ味ヨヤいるあるのさまぐそんる夏を
あうあるホ〳〵こうこうハちんゆものぐこへるが晩日
酌り目よ芝居式見せくこるる亭主ぐ持とうこう

まもと「蜘」ゐんよりあづやとりへが今度実五郎ハ大當りで
ごぜうまた早くよくあるさんくあつぐるさいと
「フウ」仁をさる人「蜘」平ゑ引一八谷ハ何とゐやらいの時代狂言
で二番目が七変化サ「ひ」平ゑ引モウ又ハ「蜘」ぐもくること
さやるぜそんわくよ力を入まくいつぐとつるる真さ「熊」
谷ハ実五郎ハ「蜘」さうぐ方振サいへ初まるゆざがお結ハぐつ
ちうでごぜくあまとコサおひどん由隠居振がよぞのあるあ
「ハ」アイいつそ「あ」ぐが少たんのう「蜘」そハ引ハ戸だうう全

六さんがうるさぐのぐ「ひ」ハイ左振サ山口ろるがヨリ全六
さんくとわんよくく膜がたつてト。蜘五郎が脊中とぐ
づさ。心弱くく出く「蜘」行一二の女アト追ハ似をて居恵。
モシお照振一八谷の狂言でゑ。熊谷といハ出ハかたるのの
でごぜんあまとわくハ「そ」やハ又ナゼ「蜘」ナゼとあつあ出れど
あるる穀盛を殺をさぐんゆくく。我子の小次郎が首をきる
といハもあんまりな怪いい仕振ぞやアごぞうませんぐ。ハ
ぞてめくの子ぞうく。大根や芋ぞやア有ルやハく。たとハ

嗅ァの主人の子も居る。軍とるつてからむやくざ。
先をとろさねへところちが殺されようとい中ざあ。敦盛
をとろーたとろく。誰が何といふのがちんぴたくいねごろ
て我子を殺してあまろせ。出世ごもとる夏。仕業ゆを
猛の下へ加茂紗衣を着く。兜を取ると坊主ようあつてとい
まだだがだくくのの行ありぞァどきりやせんろあ。完
ふちろきてての。刺髪ごみふるとか。孫ようこ子出家をれば九族
天よりとるとゆらいふく。出家すろかきろい功徳ようあるとい夏。

モシ〳〵其ハ了ぞうこふぐうあるぜ。あとへてようど般幽
霊が柄杓をかゝげ来ようあんぐ。坊主の方へ引摺込うとい
ふ。佛説方便虚言ぐぐぐれゆと。寺の薫間や天井ようの彫
り画ろう製あるうろ。大畧天人と云者ハ和尚の親類一
族黨を集ろあぐろふ。ちんをと早ぐてんのお先のがそんを
ようぐいぐ。あるうろアちんゆもろうれどめ。ようど私乃
親父がころ人時分ゆ日蓮とうりふ坊様のお袋が地ぢくへ
ろう二ちく。そを死ぐふうりふアこ河ぐ其坊様が凡付出りく。

ぜんぐく家来めんで作法ようぞんぐわぐさの施我鬼といふ
ことを支をさとると赦免がかなふとのつく本所の五百羅漢で
其時初め、法界のせぐきが始りさとりが喜ぐこぼ人共
勿論そのちりげでお貸を九で出中さそのぐこんらア
うそでわ人咲ぐげんぜ人其時ぐ中ぐ京ぞもめ入りまーこ。
そのぐ捨れぐろふぐろ子が坊主ぐもおろろへ地
おつく〳〵行るぐ有るのの紙ぐふーく親類縁者まぐ天
人ぐのろう。天井〳〵生まるく。猫ようでもとくわく仕来ぐへ。

一ぐ〳〵そのうべ其拵のろまぐど。ろく〳〵煩悩即菩
提とやらいうぐど。放まがくまるの人情をまくくへつへうな
ろいぐ。まりまとかくまろての愛心でもみろう。そまも佛の
お道引ア、浦山しん蓮生法師〳〵モミく〳〵そのりく
ろると此有ぐこの神図〳〵生わく。ろくと支も後人唐天
竺。ろくとくくぬ後の世の支併ン偉の甚太味噌
こを拵ぐ〳〵へ人情でぐぐ人中ぐそれど。論ろう證拠
此図の大先祖大神宮様へ坊主天竺ぐ拝ムことハ出来

まうせんぜ。其筈でもあるや。せう神は人のふるを棄べ。
佛は又へる母うを支斗りさもあたるかう反は合はね人
筈ぐごぜ人母と。ア遠イ先祖はさく置く今有る親
のちろに成くごろ〳〵や。這へば立て。たくべ歩行
と丹精〳〵。漸の支〳〵人尺ゆ。そまろう嫁の来る
とう。聟式取るとろ〳〵て。やしうまつや是う初孫の顔
見るがうのゝみと栽ゞ羊の赤るゆは家もつゞ先ら
先式いそぐのは。子の可愛くみろさく居るかう
の支〳〵ごぜ人母とぜ。サア其子み子ゞ出来。産ゞ出来。
まゞ親の血筋もたゆさゞ。神國のお國役も済とゝ
のゆ。まさ慈ゝ谷の孫よ変家ちさの。あさとあたのと。
若イ弟そ〳〵ぐづまうと。坊ちゆうゞ死ごゞも母の
どゆでちろめゆく〳〵と。神や佛く願うけく。其不の家
うと彼不の醫者と。家違の孫の孫よ家ゆん。でゞゞまつた。
此両親のあるゞ兄へどのうゆぐあうと。ロ工。工ロ。
生ちゞう佛よちうちあるまうでゆ。ゆんで焼〳〵ごゞう

まをせう。佛ちぶりも神いぶりも親よりげきをうけろこと
ようや教ハ有まをあんもあんまりふげんれん。イヤ鎌谷
ハ親ハごぞうまーちんぞ。そーく若りもろろうけ
ぢんまり嘶ハ實ダ入ッて。大きよ泡ァ喰ヤーさコレ
蝶五郎どん今ようちぶめぬ真實のいえん。ちんとも
悪うハ咲まりせぬ捨る弥あれがたをけるそる。高貴
うまーれぞ人ナンあんこん其拙よあこまろさるろ
ちやる夏アごぞうやせんちんが私ハぞうろるのんでも。

ちろとハ人間の系統受くく生れさのの此お房こいぶろ
ことをちるぞら。おあんさんも若且那も供をあの中よ
思ひて育ヤーさのの。大且那方ちぶめおあんさん方を
麻赤くろくくをものおるやアごぞうやせん。只今アさ
鎌ケ谷の夏を。吳見とおあ中ようるうこんぺ。ろーれ
さのアやうハ違ぬお心ダ子。ハ比おこん世のうるさるん。
おーーおあんべエぞうくちること。江ノ島鎌倉（お公なるさる
塩梅
との夏ちろト已勝ハ初ろれんぞそんちるこお供ハ是非

こゝろ〳〵と心だのもしきゝく居くも今ハちゝの出洲
法もあり〳〵と考中〳〵家ゞ平日お奉の時で
さゝ出ぎゝぶのおめくさん。孫よ此節出病家を関へ出
引込ぐ居さらと斗り申ゝ呂お臨様ゝうおねげくぐ
江ノ島鎌倉ハテナ江ノ島ハ〳〵ゞ鎌倉ゞ三ゝよこそね豆。
若且那の今度のおぐゝみさ角を立てぬく出心から。
うる世人婆婆と見うぎゝく。一筋よ後生を拵ケ間出
ひのきのゝこゝ〳〵を連くおのぐゝるきゝあも。あゝぐ

迷惑させめ人為と。ふゝと心へうんぐら。身ゝの夏や
何や彼を思ひ合せる夏だろう。モシそりやアあんまりで
おぐのまゝぜ百願〳〵十ヨうるゝとゆゝ出病家も
其通り石ゝかぶり付くも。ゝくゝるゝと出てきゝ待
のあゝねへ菜の廻り。そもゝよマアちゝとも早く死よ
たのの。〳〵ゝくるゝゝ坊ゝ多ゝ成るのと思ゝく
斗りぐゞるのの。どゝ〳〵て菜も廻りまゝ。おゝぐゞう
ちぐゝもおけの一心成田様へ三年願酒ゝ比七日の

人の物ごらも。今日ガ丁度けちぐらん故翌日ハ成田へ
ゆくるほより。若旦那の出帰系あるさのハ病気ぐらぐ
九の通り若旦那さん若おくさんとぴつく出這入てて
ぐらり。モしきれッ場のさくらせ人是程まぐる苦労
ゑやさよ。かんどんのおめさんガあんまりふぐあれ人お心
でおぜ人まもとぴきの人衣ガ羅もさくやと方付ケ。お
二人りハ出あんどさせうと。七ツ下りよ漸々と尋ッ當ッ
さ花形村若旦那の隠家へ一ト足ちぐく浦里ガ。親
の篠塚婆アと中ら。身受の滅ごガ知くね顔くるの掛り
を仕立て着てくおおあハ乗て四ッくで駕。おくけちくして
さくさ今と。若旦那のお言葉を半分ゆくく引返ス堤
ぐくハ二三町おくうけくハ人まくさ。身受ちくくくハ
らくぐも玉ハちくちのの。くるハ吉ちく是幸ハ才受の
金さそんハくくも。女のくさ人切くるく。お侘も一ハ日
早くくと。前へ一ト足ハ人へ一ト足下さそれぐさ浦ざと
さんハ母親ガ引分くて連くくらくさ。エ。あくちぐ

身受をさせ一人の親ゆえ人ざんかりもそのひるぜんは其
様ノだやけんな事。そもそもへ見うら若且那ゴさそでは
不自由ちのぞうぐ有うコレ蝶五郎どん取りぐーくよつる
思案いるのところ。マア其場より落付いく居ざこ。親元一
早ふのつく「蝶」モシ〳〵そんな家式おりみるさろてもそうり
ちせん。お有家が知まさそんへ。あくそうそ置ヤまりせね
マア落付く。おいぐちるまー。おふ方そんるこどろう
とおつて。式んるーふひんく居ヤーぞそもへあだり浦

里さんとそうせくちのく。おあくさんどんるさる出ろ宮だん
「ゆひ逢ふさちふろうさん見もちたり前世の果縁。
夫婦ハ二世とゆふ。世ぐそうあ其昔りみらへ出るぶ
ふうぬゆくはまどんのうひそう式見くそうぞ。お頼ヤ
てたもそれだろうがたのこと。跡を涙よりおとる矢見
ふつ〳〵紀蝶五郎も。お照が胸の奥底をゆのく取ちと
伺ちく。共ふ添ふむせる折ふ〳〵下女が案内ふ連て
入来る穀井啓庵附添老母ハあれ。顔二タ人ハハット

そちよりぬ顔をあてるまへ八胸と胸「おひどどん」八金の下
がいぶくぶくやアねへくと海まぎくを出そくり

第六回

行空の道もあやるぬぬぬの間をたどやくく地獄谷篠
塚寄くが宅式歩く。途中ま地獄のあるでくもぶくく後ど
虫が知らせくく心細くも春日屋のお代伐七八忠と孝に化
世の義理を建川通り。真立ま降春雨を悪人ホがよの志
ぶぶぶふくくくんくる後くぶ知ぶやくくきくく及の光コハ

時ちくぬ稲妻くと見返るひまも惜ちや。だつさうあびる
一下太刀の深ひホウシ引ド反返る。声を目當ま金六もさ
あくくる傘をたくみうけそのめくと打ちあるせくる者泥棒ヨイ
最早いくく。コレサだんさん番頭様ト云ものよ。くいくくあるを
ぶくくトいふる言葉全六一八ア最早死くる。弱奴ナアの口へるを
出くく見後。リヤ息ハ止タろホ全ア紙くおんぶうぶく
ア是くト彼明の玉ぶやて与一三郎のぎくん味宜紙ふくく島の
賊布人入くく渡くる箸ぶやコリヤ賊布くへぜんだりぶや

ハア胴さへちどゝ入あのさゝ。ハア胴まあも無こゝ。コレあゝ人方も
さぐつく〳〵下ダンせ（トらこれくこゝるの）（ドロ義トビ助古人が）（ゝらも先刻）
うゝたゝゝや衿をちぶのくゝ者さぶ。線のかゝりもゝ人
わゝぜ（全）ゝ。ゝ絶ゝさび見ちどちゝんどの仕業ゝて。そゝるいけと
ぶやあんゝこのゝ。そゝゝ不残尋ゝく下ダンせ。ゝも包金
出さぶ。ユ合がゝるゝゝゆゝ歩判ゝ百両渡ゝたゝ相違ハ
あの。コレゝゝゆのぶちどさぐつく〳〵さんせ（トビぶゝハ如）ゝんん
ぐゝ〳〵さぐつくゝのゝ。ゝゝあゝゝ（全）あつゝゝゝ（金が）

ゝゝ二ツゝ残が四百拍ぶゝさぐつくゝゝるゝゝ（全）ゝゝのゝゝ
ちやあゝゝゝ。ゝゝちやイどちのぶやちゝ大変じやゝゝト。
狂氣のぶゝく尋る全六飛助泥義諸ゝも俄七ぶ帯まで
引解凡ゝぶも更ゝ凡ゝぶゝゝ。三人死骸ゝゝ。ゝ泳ゝ（全）ゝリヤ
ぶゝぶやゝあゝれゝくゝのぶゝゝれゝゝ（ドロ）ゝゝ骨を折ゝくゝん
のゝゝゝ（全）イヤまゝんせぶゝもゝリヤ合点ぶゆゝぬあやゝん
（死ぬ）三人ちぶゝぶゝ（全）ちぶゝとゝふゝく。みゝゝく〳〵此者ぶ持ゝくゝゝ金
ゝ相違ハちゝゝ。尋ゝゝのゝゝ三人ゝゝゝ無ゝとゝふゝ尋ゝ

風情ぐあまく方が。着腹ぐやナ（泥）〳〵ナニく栽ホが取さトワ
何のさろくさそんる。ゝろぐれ人業をまる泥（荒）ぐやアねへそ
（全）イヤ余り後ロあるれ仕業ぐもるのそれぐもて腹たて
てそろるい。たまても心の昏るれ金づく。そいあくふるまるくよ（能）
一葬やそくいこらぐ五十両。跡五十両を変〳〵ちまへ方（取）
三人へ割分まる苦ぐやが。ハテうふるんさら是非ぐるい二十五
両ゝ四ゝ小こきよまやや甲（可分）ひるのこけまへぐや（トビ）コウく
それぐやアどのぐもがいらぐのんざとろんのろ。あんまり馬

鹿ぐくいせんぎこ（バロ）イヤ報助まるやそうのやく氏方もその
通り全六さんあへくがあやーい。ろいくふよさんざよ斧うもり氏
させてく後ぐるあへくが小力細ユそふうまくくさせめへいけぐ不届
（全）ろんでぐゴしけぐそもの。うと細のとのふ全六ぐやるひぐそる
ひる悪根性の有者ろりや。大切ろ月代の支配させてい
おろあこい太イとりくさう羽折の廻さへきてひぐや（ドロ）その正直
ろ番頭さんが。今夜の始末れぐふらへ物ぐ（全）ろくコリやみんの出
来心ぐや。後ゆも前ゆもとれが初ぐぐやふろく不勝ろぐや

そまつぐちまつ方ハ。駄くあふれさせ「とのべく」棒めエ
どふいんべくふいふ。とまるやにだきれ人ことをづあ。サア飛助
このまだそーてこんだくろう「ヨット」合点ト左右ら立「全」からくく一コ
そりやあんまりたん者じやくく。こけ姉さくく下よ居さ
かぐ斯ぢや鬼角おまつ方ハ私ぐ巻上てと思ふくいる。私ハ
亦二人「の」流を繋く斗りまるさん論ぐひるい。ぢやといふて
斯繋心の部くいる中ぐ。互よ帯解くん者さ死ぐや
ゐ「ふ」商の支ぢやりめ。どちのふも隠せべくせまあいろくら

そまつぐ亦此様成不よ長居して。人眼ハかりのなりや。堂
座後光仕舞拴笑じや。まろ何じやろと三人揃く地獄
谷まつぐ行く。ハテ面々の身晴じやゆりぐまうそろうて
為見そまでうぐひいたまあつぐ「そ」て無
時ハ婆アもちろうぐく。三人仕組ぐ狂言と思ふ
ざろふ「全」そりやそまんナ物ぢややがて坐て見るれハ三人
の中ぐちろうろ出るぢやろ「成わぐ」斯互ようたふ
ふるとと。持組の其万まで。ろう幕末も鬼よ見るぜ「ゐ」ぞ

志田郎

蜘五郎

とゝとゝのて居くまゝ〻でもてきんどやア居様へうべら接
めくそまんろうへトミ時ハよへ引こちく有時ハ脊中人廻ー
ロ
ロくまゝへこへぶぶめくそんあう行べエモウ夜明ゑ近イせ井ア
番頭さん全ヲ行ちのくけまどこア待イ泥荒の云通り成程あ
ろ帚木も鬼じやトモ薪ゆぐ中せぐるいまゞ斯じや三人揃
て行キヤ何も理屈ハるつぞへ。そたせそきめ理屈ゞ大みてやっ
イヤ悪う成らや宜るい。面々の考えれじやさひ自他とのの変
ぢや。ゞ私ゞ懐中ゑぬくとあくく居ゑとろのきれ。三人別くめ

歩行中ゆへ紙折紙ゞんくゆ中ゑ芥溜の内とへポイト捨く
置く後ゑ廻のくメるといゆふも有じや「いくさ手ア」こそれ
ゑ斯為がゞ三人並ぐ中の者の懐中ゑ両方のくゆ
とゑ紙捏るへゑくくそまくく中の者ハ両方の懐くゆを入て
右と左のゆ紙握くゆびあ。あくくゆハ一本も無ぜこれでゑ大
夫ごろゆ全ヤア紙ゆくく。妙案く。さちくも早サ私
中へ這入ゆ紙入るそれ。ゑ冷くゆナアそれ私がくゆを入る
ぞ。ゑく冷懐ナア斯冷くく居るあゑ方薪心ぢや。ト他と薪ひ

うつろうれ三人並猿智恵を欲ふくみ〜眼もつんざる沢も
咲ざる悪妻をゝ互ゝ雑くいつぎると。内懐ゝ握るゝもメ
くつまるゝ安酒のためぐあそん行るる。跡ゝむぎんかゝる代の
銭七悪者どもの毒ゝ掛り。ひげ砂村のさるゝ
まぶきくたるゝ寂期降ハ涙う春雨も猶うつまるゝ
嵐風あゝぬう竹藪の。立枯の竹三本。めりくとあ〜
つけく。折るゝ腰を伸ゝ。現出る篠塚婆。振乱たる
九十九髪搔ゝまるぐゝさぐりうゝ。ゝ当人当る伐七が死骸

仕掛ケ置ゝる左右の脇半纏ゝ解々引抜〜。ぐゝ金
きゝぐゝふ。微笑恵我懐へ入ゝる脇手ハ五十両。まぐ百両
猪まゝぬうねゝ期ゝる笠の其笠当を心当ゝ。まど
つまるうたくさゝよゝ心いゝちくゝ居る眼前ゝあゝくゝ。ゝ三
度笠立心婚〜く取ゝくゝ早く引切笠当も。夕ア夜延の
計仕業ゝゝ延ゝ〜。脇手と共ゝ〜ゝぐく折
節ゝ鳥蝶五郎。成田稲の鹿島立来ゝる途ゝ中ゝ人新。
合点のゆゝぬとてうちんの明を曲ゝ袖も狭き小路のぬう

水から火影に来あつて婆ア撫持しおゝる切を産婆乃貝あり
てうちん目當にたどりきつて。うそべひどのく暁の鐘も哀や
生死を。あげしたがふにさゝされ川浪よりとふむ明烏後ノ
正夢さめて気つかせぬ巻の物語ハ近日出板仕候

明烏後正夢三の巻 尾

二代目 南仙笑楚満人
合下 瀧亭鯉丈 合作

歌川國直画

涌泉堂板

秘方 き[illegible]丸功能書　小半剤入 代百二十四銅

一第一かぜのひき。[illegible]
一[illegible]
一[illegible]
一[illegible]
一[illegible]

[illegible]

本家　江戸両國横山町三丁目　大坂屋半藏

取次

[illegible]

尼子九牛七國士傳　近刻　為永春水著　歌舞妓織　糸[illegible]　二編　業亭行成作　近刻　貞斎泉晁画

滑稽和合人　二編　近刻　滝亭鯉丈作

和漢軍書後八[illegible]　[illegible]

書林　江戸小傳馬町三丁目　文溪堂　丁子屋平兵衛